

医事・文談 九百六十三 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その251
子規周辺の人びと(一)

子規の生命は数え年で、僅かに36歳。しかも晩年の5年間は「病床六尺」に、殆ど釘付けの状態となり、カリエスのための痛みに、乱叫乱罵、泣きわめく有様でありながら(号泣又号泣と『仰臥漫録』明治34年10月28日に自ら記す)、喉頭癌を病んだ中江兆民の著した『二年有半』を評して「浅薄なことを書きたり」とし、病を楽しむことも知らずと書く。

死の年には、激痛のため、いよいよ麻痺剤の力を借りることとなり、日に二度乃至三度服用するに至った。

永い病床生活にありながら、その文学活動は、先ず俳句の革新、次いで和歌(短歌)の革新を成し遂げた。さらに写生文を提唱し、今日の記事文の基礎を固めた。

漱石は高浜虚子にすすめられて、虚子が発行していた「ホトトギス」に、「吾輩は猫である」を発表して一躍文名を挙げ、作家漱石の誕生をうながすこととなった。

子規が「獺祭書屋俳話」によって、俳句革新に乗り出したのは、明治25年(一八九二)のことである。翌26年、奥羽行脚に際し、各地の宗匠を訪ねて、その識見の固陋なのに驚いて、いよいよ俳句革新の志を固めた。

子規の俳句革新は、「月並俳句」を打倒することからはじまった。当時の俳句が、風流がったり、教訓的だったり、人の心をくすぐるような浅薄な句であった訳である。

子規が盛に唱導した「写生」ということは、共に新聞「小日本」にいた中村不折の論からのように説く人もあるが、必ずしもそうではないようである。

不折が子規の三十三回忌(昭和9年9月)に述べた「追懐断片」の末尾に、「先生(注・子規のこと)が文学上に唱えた写生の議論は、必ずしも僕

等の絵画に於ける議論が影響したとは思われないう。その点は寧ろ御互に共鳴したと見るべきであろう」としているが、写生が不折から発していることは間違いない。

俳句の革新がほぼ成ったと悟るや、次は和歌(短歌)の革新を志した。「歌よみに与ふる書」は一から十に及ぶ長文で、「仰の如く近来和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以来、実朝以来一向に振ひ不申候」一貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集に有之候」の如き瞠目すべき文で始まるのである(明治31年)。

俳句にしろ、和歌にしろ、当時は陳腐となり、新しい思想を盛ることができないと子規には思われたのであった。明治の新時代に、古くさい思想や表現は棄て去るべきものであった。

半死の病床にありながらも、文筆を絶たず、筆をとることができない時には、口述筆記をさせるなど、その活動は健康者をしのぐほどであった。句会、歌会、蕪村句集輪講会を枕頭で催させて、意見を述べるなど、氣力の旺盛なことは重症の病人とは思えないほどであった。

これらの活動の身边に、常に同調者や賛成者が居たことは幸いであった。尤も賛成者といっても、子規と激論を闘わせた先輩の内藤鳴雪の如き人もいたから、常に同調・賛成者ばかりではなかった。

周辺の親しい知己、友人、門下生が何れも極めて優秀な人物が多かったことは、子規の志を遂げるのに大いに与って力があつた。それでなければ、いかに子規といえども志望を達することはできなかつたであろう。

周囲に集まった人々が、それぞれの道で一流の人物であつたということは、子規の人物がそれらの人を吸引する魅力に富んでいたことをあらわすのであろう。

結核が感染症であることは、当時でも広く知られていた。それでも多くの人が、感染を恐れず子規宅に集り、飲食を共にし、特に親しい人は看護当番となり寝泊りをしている。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233